

わたぼうし新聞 第12号

発行者 わたぼうし連絡会
発行日 1988年(昭和63年)8月1日

第12号の特集 「介護とは Ⅲ」

守る 谷川俊太郎

いのちは 守る いのちを守る
いのちをかけて いのちを守る
言葉はない ただ叫びだけ
武器はない ただおのが体だけ
どんなまやかしかもなく
どんな甘えもなく
いのちは戦う いのちと戦う
新しい いのちのために

この新聞は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考え等を出し合い、主義、主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

特集《介護とはⅢ》

このコーナーはいろいろなテーマについて、さまざまな人たちに意見を述べてもらうコーナーです。

10号より「介護・介助について」考えてきていますが、今回は第3回として家族の立場と施設職員の方々からの意見を中心に取り上げてみました。

～家族の立場から～

我が子の成長を見て 家族より

息子、健もCP（脳性小児マヒ）の右方マヒという障害と付き合ってはや17年になります。その間、多くの方々から暖かいご指導と善意と励ましをいただきました。

初めて施設に入所した頃は、座ることも一人で食事をすることも出来ない状態でした。自動車の古いタイヤに腰までをすっぽりはめこまれ、あどけない顔でちょこんと座っていた姿は今でも忘れられません。それから幼稚園の頃に、四角い板の上に真っすぐ立つように固定された装具を使っての起立訓練が始まり、歩行器、右足の太股からの長いアパラート（装具）、そして膝から下の短いアパラート（装具）と移行し、この頃の歩行へ向けての進歩は著しいものでした。彩光苑へ入所したのは装具なしで歩いた初めての春でした。彩光苑では身辺の自立指導をしていただきました。お陰様で一人で入浴することから洗濯、掃除まで手を借りずに出来るようになりました。

そんな成長過程で家族の介護の型もおのずと変わり、負担も少しずつ軽くなってまいりました。しかし、家族の介護は障害者だから、施設に入っていて可哀想だからとついつい甘やかし、過保護となりがちです。知らないうちに本人の自立の芽を摘んでしまいます。

“手を貸さず、目を離さず”と常に心に思っているのですが、気がつくと思わぬ世話をしています。今少し親の役割を認識し、自立の手助けが出来るよう心がけたいと考えております。

これから先、身体的な介護の負担がなくなった分だけ、健が大人になるまでずっと続けていけるもので、それが生きがいとなるものを一つだけ一緒に探していこうと思っております。大きくなるにつれ困難になる障害者との付き合いです。うまずたゆまず、一緒に歩んでゆきます。

夫の介護をして 家族より

昭和61年3月26日は私たちにとって結婚して15年が過ぎ、16回目の記念日です。そして、臨時で1年間努めた私に、午後3時本採用の面接をする辞令をもらい、緊張した気持ちで朝を迎えるはずでした。

6時過ぎ、突然電話がなり、主人が事故に遭い重傷だと聞かされ、どのようにして病院に駆けつけたのか、いつも通っている道を走っているのに、病院がとても遠くて、いらいらしながら、駆けつけたことだけ思い出されます。

その日から3ヶ月間、主人につきっきり、2ヶ月間ほど頭を牽引して、看護婦さんに体の向きを変えてもらい、寝たつきりにしていれば、筋肉が固まって動かなくなってしまうと言われ、時間があれば手足のマッサージ。

それでも2ヶ月間は尿の管をつけていましたので。夜は何とか眠ることも出来ましたが、管がとれてからは一晩で9回も起き、眠ることも出来ない日が半年ぐらい続きました。

主人は体が不自由になってからは、何をすることも甘えが先立ち、自分から頑張ろうという気力に欠け、私は「動かなければ、努力をして人の2倍も3倍もリハビリをして!!」、 「いや、体が動かない」と。毎日口論が続き、こんなことをしては主人の為にならない。何でも私に甘えていたのでは、自分で出来ることも出来ない人になってしまうのではないかと思い、私としては「可愛い子供には旅をさせろ」の心境で、野々市の病院に預けました。

しかし、主人にしてみれば「お母さんは、俺が厄介で遠くへやるのやろう」とまで言う始末で、気持ちが通じず、情けなくなって涙が流れ、「そう思うのなら少しでもよくなって早く帰ってきて!!」と厳しく叱りましたが、それでもプラスばかりでもありませんでしたが、自分に甘えないで厳しく、これからも頑張っ欲しいと思います。

祖父と介護 家族より

私は昭和58年9月に七尾市で行われた「わたぼうしコンサート」で初めて介護を体験しました。

一体どこまでしてあげればいいのか、皆目見当がつかない状態で、人の世話とは大変なものだとつくづく感じました。しかし、ふと何か昔、似たようなことがあったように思いました。私が中学生の頃、祖父の世話をしたことを思い出したのです。

私の小さい頃は近所の銭湯へ祖父に連れられて行き、祖父の体が弱ってからは、私が祖父を連れて行くことになったのです。体が弱かった祖父を銭湯で世話したのですが、中学生ぐらいの頃になると、祖父を連れて歩くことが恥ずかしくなって来てしまったのです。当時その姿を同級生の女の子に見られるとカッコウが悪い、恥ずかしいと感じるような年頃だったのかなと思います。

それからは、父が私に代わって祖父の世話をしたのですが、しばらくたって祖父が寝た

きりになり、私が高校生の時この世を去ったのでした。

祖父が亡くなってから、「よくおじいちゃんの世話をしたね」と言われたとき、私はとても恥ずかしくなったのです。確かに祖父の世話をしていました、亡くなる直前のことを考えると、とても私には「世話をした」という実感はありませんでした。

わたぼうしコンサートで身体障害者の方々の介護をするとき、祖父の世話を最後までしてやれなかった、そのときの自分の気持ちが恥ずかしく思えました。

介護には、こうした自分の身内に接するような気持ちでやって行きたいものだと思います。しかし、実際はお互いの意志の疎通があって介護する（される）ことがどれぐらいあるのだろうと思います。そして、外に出て人に見られても恥ずかしくないで出来るだろうか、そんなことも考えてしまいます。

～施設職員の立場から～

施設における介護とは 障害者支援施設・職員より

施設職員の立場から介護とは何かを書いて欲しいとのことで依頼を受け、改めて介護とは何かを考えましたが、大上段に問われてもなかなか書けないのが正直なところではあります。

南陽苑は、授産施設で障害者の方々に職場を提供し、自活していただくことを目的とした施設です。少なくとも、障害者でも自分の身の回りのことが出来る人が入所しており、直接入所者の介護をする場面が少ないのが現状です。

入所者の状況をこれまで見てきての、介護という点から考えますと、どうも二つの傾向があるようです。介護されるのが当たり前という人と、出来るだけ介護れないように努力しようとしている人です。どちらかというとな前者の方が多く、そういう傾向を取り除いて行くことも自立ということを推し進めるうえで必要になってきます。

なかなか難しい点が多いのですが、介護する側と介護される側という立場の違いと、一人一人の受け止め方の違いによって、介護することは微妙に違ってくるものだろうと思います。

適切な介護とは何か。これは施設職員として常に考えさせられる大切なことだと思います。

～障害者の立場から～

重度障害者の介護とは 在宅障害者

私たち重度の障害者にとって、介護という問題は切っても切れないことです。

社会的にも弱い重度の障害者を介護することはとても大切で、介護する人は大変な苦勞があるのではないのでしょうか。介護を受ける人も精神的に介護人に気を使うのではないのでしょうか。健常者も一、二度介護を受けられる立場になると思います。

介護とは簡単に言いますと、人と人との助け合いではないのでしょうか。人間は人間らしく生きて行かなければなりません。人を助ける、人に助けてもらおうという助け合いの気持ちが介護ではないのでしょうか。

障害者も自分のことだけでなく、自分よりも障害の重い人を助けてあげる。例えば手の不自由な人がいれば、手の障害の軽い人が助けてあげる。言葉の不自由な人には言葉を助けてあげるなど、色々と障害者同士も助け合いが出来ると思います。皆様はどうお思いでしょうか。

介護というと重い気がしますが、他人を自分の出来る範囲で助けてあげる。それが介護ではないのでしょうか。

～地域住民の立場から～

私の援助論 地域住民・牧師

20年間ネパールで伝染病と闘い、ロータリー国際理解推進賞を受けられた岩井昇氏がテレビで語られたことばが朝日新聞に載っておりました。『いわゆる援助ってというのは実は人間のいちばん基本的な喜びを、アジアの人たちが奪ってしまうのかもしれないですね』。“みんなで生きる”ためにつくしてきた人、与えてやる教えるといった姿勢ばかりが全面に出る援助は本物ではないことを言いたかったのであろうと思います。

私は職業的立場上、援助活動は多くの要請によって始めることが多い中で、いつしか助けて上げるという立場の怖さを、もっと極端な場合は、“助けなければならない”との使命感に駆られてすることの中にある危険なわなを感じます。

してあげる人、してもらう人の関係は望ましい援助活動とは言えない。“助けてやる”の姿勢は一方通行になりがちで、やがてある人には自らの無力さが暴露されて、かかわりの範囲が自分が出来そうな範囲に限定されてしまいやすくなります。

援助活動の基本は「その人が、その人になって生きていくための肥やしになる」と聞いたことがあります。つまり援助活動は人と人との心のかかわりを抜きに考えられないことを思います。医師の第一の任務は単に医者という立場でその人を見てあげる、正しく診察すること以上に、慰めの言葉、励ましの言葉を心にかけてあげることを聞いたことがあります。

私がある施設に出入りするようその人たちが、二言目にいつも「あなたがた健常者」と言われてびっくりしました。私はそんな気はさらさらなかった。つまり、私の接し方ややはり「してあげる」と言う姿が映ったのかと思うと反省すると同時に、しかし、また一方では、決して充分には痛み、苦しみは共にできないが、星野富弘さんと同じ生きることにおける本質的な喜び、感謝の生活の毎日、そんな生涯はすべての人に与えられていることを共に喜びたい、ともに豊にされたいと思えてならないのです。

私はクリスチャンであることに深い感激を覚えています。障害者と言われる人と比べて何にも優れたところはありませんし、いえ五体満足でもっといいかげんな生涯を歩んだのです。

しかし今、生かされていること、罪深いものが愛されていることから来る神様と人の愛は、健常者、障害者との区別の見方、差を取って下さったように思いますし、その心と心との交わりかかわりで、教えられることも多くあります。当然のことに慣れて本当のものが見えなくなっている私たちであるかも知れません。星野さんが『愛・深きたびより』と『風の旅』の中で、首を振ることしかできないことが、神の愛、人の愛、生かされている喜びを知ることには何の支障もないと書いてありますが、私には大きな慰めでした。障害者の皆様には充分でない私たちの姿を許して欲しい。

人間の一番基本的な喜びを共に喜びたい。みなさまとの何のへだてのないような交わりに本当に本当に感謝しています。

「介護・介助」アンケート結果報告 その3

昨年8月に実施いたしました『介護・会助についてのアンケート』は障害者41名、健常者47名、合計88名の方々に回答を戴きました。ここに改めて皆様に厚くお礼を申し上げます。今回はアンケートに寄せられた個々の意見を掲載いたします。

施設職員 M.O (女)

初めて障害者と接し、介助に当たった時は、そうは思っただけなのだろうけれど『かわいそう』という思いでした。けれど施設職員として介助しているうちに『かわいそう』という思いでは、やっていけないと感じるようになった。

この人の為に私はどんなサービスが出来るのだろうか、ということを考えなければならぬ。相手の要求をどこまで聞き入れ、「突き放すか」ということが、非常に難しいなーと感じている今日このごろです。

施設職員 M.O (男)

障害を特別視するのではなく、人間としての尊厳を持つように心がければ、相互の気持ちを通じ合うのではないのでしょうか。

何も変わらない人間関係として、自然に成り立つような雰囲気をつくりましょう。

施設職員 M.I (女)

自分で出来ることまで……。と思っている障害者の人の手助けをして嫌な思いをさせられたことがあります。介護する側は、やっぱり相手の意志を聞いてあげることが大切だと思います。じっくり、耳を傾け心から話を聞いてあげる。その気持ちは、持ち続けようといつも自分に言い聞かせています。

施設職員 H.K (男)

障害者の方は、自己の日常生活での能力を知り、他の人の親切に甘えることなく生活して下さい。一般の方々や地域の人々は障害者に対して、外見上誤った見方をしていると思われます。もっと内側から見べきだと思います。しかし、私も所変われば見方も変わることは確かである。

施設職員 T.O (男)

我々は健常者も障害者も同じであると思う。その中で出来ることと、出来ないことがある。お互いに助け合うことが社会生活である。しかし、障害者の中には出来ることに取り組もうとしないで、健常者がすることが当たり前と思っている。このような考えを改めて何事にも一生懸命取り組んで欲しい。

養護学校教員 N.D (女)

健常者、障害者という観点ではなく、お互いに助け合って生活しているという気持ち。

養護学校教員 Y.K (男)

難しいと思うことは、どこまで介助するかということだと思います。出来ることまでしてしまうのは適当でないと思う。こちらが何をどこまですれば良いのか、ハッキリ聞くことが大切。ただし、コミュニケーションを取ることが難しい人だと、つついやり過ぎてしまいます。

一般 A.N (男)

障害者の方たちと交わって感じたことは、彼らは『生』という問題を真剣に考えていることだった。彼等の詩や言動は深いものがあるが、それを十分に把握してあげることが出来ないのが残念である。

一般 M.K (男)

障害がどのようなものかわからず、どこまで自分で出来るのか解らないため、介助をどこまでして良いか迷ってしまう。

甘やかして頼るようにさせてはいけないし、出来ないことを「しろ」とも言えないし、何でも聞こうと思ってみても、聞いて良いものか、解らなくて難しいです。

一般 N.Y (男)

健常者にとってはその障害者の主体性（意志）をあくまで尊重して介助をすることが原則であり、また逆に障害者にとっては、自分がどのように介助をして欲しいのか伝える努力が必要でしょう。

ボランティアや家族による介助はとかく、してあげる→してもらう関係になりやすく、これでは本当に障害者が安心して、何も気がねもない生活を営む介助が得られないのでは。

そのためにも、障害者の生活に不可欠の介助にも公的に保証されねばならないと考えます。公的保証の方法には金によるもの、人によるものの両方がありますが、いずれにせよ、障害を持つ人が当たり前生きる上での介助は、何も気兼ねも負い目もなく受けられる保証でなければなりません。

比較的進んでいる東京都の実態を調べてみてはどうですか。

一般 Y.M (女)

私は身体のどこにも障害がなく、有り難い日常生活を送っています。「有り難い」と思えるようになったのは障害を持ちながら、自分の特技を生かしたり、自分の文章などで表したりする姿を見せて戴いてからです。

生きるということは、私は今まで自分自身の力で生きていたと思っていましたが、自分一人で出来ること何て高が知れているし、やはり人間は『生かされているんだ』ということをやっと気がつきました。

そういう意味で障害を持った方々は、周りに感謝の気持ちを持つ分、心は優しいし、『生きる』ことに一生懸命で素直だと思います。

障害を持った方々の介護をさせて戴くことは、単に出来る人が出来ない人を助けるということではなく、自分たちが生かされているということへの感謝と喜びの現れにならなけ

ればいけないと思います。

一般 A.N (女)

私は七尾市国分町の「みのり園」へお手伝いに週2回、行っています。子供たちは非常に心が美しく、話しかけたくて私を待っています。

授業のとき「あいうえお」を教えられていますが、みんな一生懸命に習っています。健常者より倍も真面目だと思います。

少しでも覚えて町の中の字が読めると、本人たちもまた、違った人生観が出てくるのではないかと感じています。

「NHKラジオ社会福祉セミナー」へのすすめ

わが国では、ここ数年来、社会福祉サービスの増進と多様化への要請がたかまっている。

その一環として、今年度から「社会福祉士法及び介護福祉士法」が施行され、福祉専門職についての資格制度が発足しました。

この資格制度の目的は、老人や障害者に対する相談や介護を依頼することの出来る専門的な能力を持つ人材を養成、確保して、施設や在宅での介護の充実を図ることを目的としています。

この番組では、福祉の基本的なことから、老人・障害者・児童などの対象・分野についての理解のしかた、援助、介護技術理論や方法が実例などをおりこんで放送します。

(テキスト開講の言葉より)

・放送時間について

NHKラジオ第2放送

毎週日曜日 午後8：30～9：00

再放送：翌週日曜日 午前7：30～8：00

・テキストと今後の放送内容について

第1期 社会福祉の基盤は売り切れ・放送済

第2期 援助介護と理念と方法

(8月～11月放送分) 7月20日ごろ発売予定

8月 援助の基本原理

9月 援助の分野と方法

10月 援助技術 (1)

11月 援助技術 (2)

第3期 援助介護の実際と今後の社会福祉

(12月～3月放送分) 11月20日ごろ発売予定

12月 介護の役割と方法

1月 介護の実際

2月 リハビリテーションの方法

3月 社会福祉の展望

発行所：日本放送出版協会

定 価：650円（予定価格）

団体紹介コーナー

－石川県脊髄損傷者協会－

石川県脊髄損傷者協会は、何らかな事故で脊髄を損傷し、車いすでの生活をしなければならなくなった人たちの会です。

この協会の事業としては、身体のハンディを克服し、年に5回程度の運動会・温泉療養・研修会などの多彩な行事を行っています。会員の皆さんも、それぞれ自分にあった行事に参加しています。

石川県脊髄損傷者協会も発足して早20年、今までに色々なことがありました。しかし、会員が一丸となって精一杯頑張ってきました。

現在は会長を先頭に、会員数120名を引き連れ県委託事業などを行い、精一杯頑張っており、現在に至っております。

またこの新聞を御覧になって脊髄に何らかの障害を持ち、入会を希望されたい方は事務局までご一報下されれば幸いです。

人・ヒト・ひと・人物紹介

I.Yさん

1. 年 令

?

2. 住 所

3. 障害名

脳性小児マヒ

4. 出身地

?

5. 職 業

縫製

6. 趣 味

手芸

7. 現在の夢

あまりないけれど、施設から出たい。

8. 外出の回数

月に4回

9. 外出の工夫

タクシーで出かけるか、友だちに乘せてもらう。

10. 主にどこへ出かける？

スーパー

11. 介護者を見つける方法は？

友だちとか

12. ボランティア活動についてどう思いますか。

別に考えていない

13. 健常者に望むこと？

望むことと聞くのはおかしいのではないのでしょうか。障害者も健常者も同じ人間なのだから……。わだかまりもなく話せることが出来たらよいと思う。

14. 好きな食べ物？

カレーライス

15. 好きな言葉？

おもいやり・優しさ

16. あなたの生きがいは

生きがいと聞かれてもわからない。

17. 障害を持って得をしたことは

18. 障害を持って損をしたことは

このことを聞くのもおかしいのではないのでしょうか。考えた人は「得をした」

とか、「損をした」とかをはっきり言えますか。「障害者です」と言って、甘えている方がいるように思います。

19. その他自由に語る

施設の在り方。人間として扱って対応しているのか、とすることを考えてしまいます。無視されすぎるので……。悲しくなります。施設って何なのでしょううか。

催し物紹介コーナー

『なら・シルクロード』障害者来場ガイド

(1) なら・シルクロード博開催概要

- ・メインテーマ 「民族の英知とロマン」
- ・サブテーマ
 1. 「文化の創造の旅」
 2. 「シルクロードで結ぶ民族の心と歴史」
 3. 「新しい奈良の道しるべを求めて」
- ・会場：奈良公園一帯・平城宮跡
- ・会期：4月24日（日）～10月23日（日）
- ・時間帯：午前9時～午後5時
ただし7月21日～8月31日は午後6時まで
- ・主催者：奈良県・奈良市・NHK
- ・入場料金

一般	2,500円	障害者	1,200円
高、中学生	1,400円	小学生	1,000円

(2) 障害者に対するサービス

①入場料金の特別割引

- ア. 対象者：身体障害者手帳、療育手帳などの所持者及び介護者1名
- イ. 購入方法
 - a. 当日、入場券発売所に身体障害者手帳等を呈示して購入して下さい。
 - b. 団体来場の際は、代表者が手帳をとりまとめて購入して下さい。

②老人休憩室

各会場にお年寄りや、障害者の休憩所としてご利用下さい。

③手話による案内

各会場の案内所に手話ボランティアを配置し、手話による案内をします。

④車いす等の貸し出し

各会場の貸し出し所で車いすと杖の無料貸し出しをします。

⑤点字ガイドブック、点字ガイドマップ、車いす専用ガイドマップの無料配布。

駐車場の予約申込先

〒630 奈良市水門町100番地

シルクロード博覧会 会場運営第1課

☎ (0742) 21-2064

『かがり火 '88』 =第23回全国盲人結婚研修会=

目 的：全国の独身盲青年男女を対象として開催し、出会いの場を提供すると共に、お互いの交わりと理解を深めることによって盲人の結婚問題を積極的に解決するための一助とする。

対象者：全国の独身盲青年男女（男女45歳まで）90名

主 催：社会福祉法人岐阜訓盲人協会 岐阜訓盲人協会奉仕者の会

日 時：昭和63年9月29日（木）13時～30日（金）13時30分

会 場：岐阜市長良川畔 「ホテルらいせん」 ☎ (0582) 65-6528（代）

申込先：〒500 岐阜市梅川町1-4愛育館 ☎ (0582) 63-1310・63-4921

FAX (0582) 66-6369

参加費：参加者1名につき8000円（付き添いも同額）

申し込：参加希望者は「かがり火88」に必要事項を記入し、参加費と一緒に8月10日方法：日（水）までに愛育館まで申し込んで下さい。

また、9月20日（火）以前の参加取り消しの場合は、参加費を全額返金いたします。

第2回ふれあい福祉まつり 在宅障害者

11号で紹介しました「第2回ふれあい福祉まつり」について、その様子を書いていたできました。

去る5月15日に金沢市本多町にある県社会福祉会館において「第2回ふれあい福祉まつり・ふれあいネットワーク」が開かれました。

これは「ふれあい福祉まつり」実行委員会が主催し、金沢市・県教育委員会・石川テレビなどが後援する大きな催しでした。当日は雨にもかかわらず延べ460人程度の人々が集まりました。

この福祉まつりは実際に障害者とふれあう中から、一般市民の障害者の理解を進めるとと障害者とその種別を越えて集まり、お互いに交流しながら理解しあうことを目的に昨年からはじめられたものです。

参加団体数は約20団体とまだ少なく、これからという印象でした。それでも、中央ステージの歌・バンド演奏・アピール等をメインに、参加団体のPRコーナー・シンポジュ

ーム・福祉映画・各種相談コーナーと内容は多彩で、楽しくかつ有意義な一日を過ごすことが出来ました。

僕が所属している『ひろびろ共同作業所』も参加団体に連ねて、障害者が働く作業所だからといって、施設の中だけに閉じこもるのではなく、積極的に地域の催しに参加していろいろ色々な人と触れ合うことが大切だと思いました。

僕はひろびろ共同作業所として作業所の仲間と中央ステージで歌を歌い、会場の皆さんから温かく聞いてもらいました。

ステージの後、ほとんどPRコーナーにいたために全体の様子は分かりませんが、僕なりに際だって見えた企画といえば「かめの子の集い」の舞踊「町でみんなでパフォーマンス」です。僕はわずかしか見ていないので内容は把握出来ませんでした。メンバーが前日に集まり、自己紹介や体験したことを絵や文章に表現し、それに基づいて舞踊創作を夜遅くまで打ち合わせをして本番に臨んだそうです。

自分たちの思いを一般市民にアピールして行こうとする『かめの子』の姿勢には好感を持ってました。また、このように積極的な人たちや障害者団体が拘わるようになれば、もっと大きく発展して行くと感じました。

この福祉まつりが終わって特に感じたことは、参加団体の関係者はわりと来ていましたが、在宅障害者や一般市民の参加が思ったより少なかったことです。色々な行事とぶつかったかも知れませんが、このまつりがまだまだ世間に知られていないのも確かです。

福祉に対しては閉鎖的な金沢では、ねばり強くPRをして行かなければ、障害者と一般市民との交流の場を作ることは出来ないと思いました。

また、この催しを受け入れる福祉会館の方からも厳しい条件が付けられたため、昨年のようなバザーや太鼓などを使った華やかなステージが出来なかったり、参加人数も少なく地味な福祉まつりとして終わった気持ちがします。しかし、最後は中央ステージで、出演者・参加者の心が一つになり活気のある歌声がいつまでも響き渡っていました。

来年への個人的な願としては、今年以上に一般市民や障害者へのまつりのPR、参加して交流を深めて欲しいし、それを受け入れる福祉会館の方も柔軟に対処して欲しいと思います。

最後に、福祉まつりの開催にご努力された実行員及び関係者に心から感謝をしたいと思います。読者のみなさんも来年は参加してみませんか。

本の紹介

福祉の思想

糸賀 一雄著 発行所：日本放送出版協会 定価：600円

『福祉の思想』は、精神薄弱児をめぐる根源的な問題提起からはじまっている。しかし、この中で、たえず主体は差別されてきたものたちである。糸賀は、「人とうまれて、その人なりの人間となっていく」自己実現の過程に社会福祉の積極的意味を見出し、発達保証という理論を掲げた。

さらに糸賀は、施策の重点課題を具体的に明らかにするとともに、施設での実践にとどまらず、地域社会、社会全体へと発展させ、社会福祉と福祉計画の役割を問うている。

購読費納入のお礼

11号に購読費納入願について同封いたしました。多数の方々はこの新聞の趣旨をご理解いただき、購読費の納入をしていただきました。ここに皆様に厚くお礼申し上げます。今後も、皆様のご期待に沿うような内容となるよう頑張りますので、ご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

皆様からお預かりした購読費は、当新聞の経費と運営費として使わせていただきます。

なお、領収書は勝手ながら郵便局発行の受領書を領収書としてさせていただきますので、ご了承下さい。(事務局より)

編集後記

花粉症のシーズンも終わりやれやれ一安心。夏に向かって格好よく行きたいところですが、暑さに弱い私です。今、3年に一度のアートフラワー（布花造花展）の準備中です。ここで少し宣伝をします。

・会 期：10月7日（金）～9日（日）

・場 所：羽咋市公民館ホール

喫茶コーナー、ミニコンサートも同時にと色々な趣向を考案中なのです。皆さ～ん是非おいで下さい。という訳であわただしい毎日が過ぎて行きます。(M. M)

ただ今、14号テーマ「生きるとは」 原稿募集中！！

13号テーマは 介護とはIV

14号テーマは 生きるとは